

いぶき

5

2007年 3月23日 発行



第二回生命科学研究科・ウイルス研究所学生フェスティバルの口頭発表風景
2006年10月19日、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて第二回生命科学研究科・ウイルス研究所学生フェスティバルが開催されました。関連記事を7ページに掲載しています。

目次

研究科長挨拶	西田	栄介	2
生命科学研究科シンポジウム報告	稲葉	カヨ	3
21世紀COEプログラムを終えるにあたって	米原	伸	4
魅力ある大学院教育イニシアティブについて	石川	冬木	5
新任教授紹介	渡邊	大	6
	荒木	崇	6
話題	柴田	寛文	7
	室井	かお	8
	遠藤	達	9
学生・卒業生の広場	垣塚	彰	10
生命科学研究科事務部の設置について	梅川	碧	11
人事異動	福本	穂	12
編集後記			12

生命科学研究科長

西田 栄介



今年もたくさんの人が生命科学研究科を巣立って、様々な新たな場で活躍を開始しようと期待と不安の気持ちで、何となく落ち着かない日々を過ごしているのではないかと思います。同窓会誌でのあいさつですから、何か元気が出るような、はなむけの言葉をとと思うのですが、気のきいた文を書くのはなかなか難しいものです。しかも、皆それぞれ異なる思いと境遇にありますから、全員にフィットすることは書けそうもありません。私自身は、ずっと大学にいて、教育・研究活動をしており、大学外での職業を実際に体験したことはありません。そこで、常日頃考えていることという科学研究に関することにどうしてもなってしまう。年度の変わり目である3月4月にいつも考えることは、「続けること」と「変えること」とのバランスです。研究においては、どの職業でも同じかもしれませんが、一つの道を究めることが極めて重要である、とよく言われます。私の学部・大学院、そして助手時代の恩師も、「〇〇といえば西田」あるいは逆に「西田といえば〇〇」と言われるような旗印となる〇〇を作りなさい、と口癖のように言われていました。〇〇は細胞分裂というような研究対象あるいは生命現象でもいいし、チューブリンというような分子や遺伝子名でもいいのです。すなわち研究対象に執着して続けなさい、というメッセージです。私もなるほどそうだなと思いましたので、そのように努力もしましたし、私の研究室の学生にも同じようなことを言ってきました。しかしこのごろは、あまりにこのことを強調することは、生命科学においてはマイナスの面もあるのではないかと、思うようになってきました。思いきって「変えること」によって、革新的な進展を生み出すことができるかもしれません。しかし、また逆に、うまく行かなければ「変える」ということを安易にくり返していれば、こだわって集中していればこそ開けるブレークスルーの機会を失ってしまいます。どこまで「続ける」のか、どこで「変える」のか。この見きわめは非常に難しいと言わざるをえません。また、何を变えるのか、どのように変えるのか、も重要です。これらの様々な時の判断の基礎となるものが、その人の個性だと思います。言い換えれば、その人の「流儀」です。「カラー」と言ってもいいかもしれません。研究の進め方、続け方、そして変え方にその人の「カラー」が出るものだと思います。「カラー」が出るのが重要だと言えるかもしれません。そこで、このごろは私の研究室の学生に、「カラー」の見える研究者あるいは人になるように、と言おうと思いはじめています。

第8回生命科学研究科シンポジウム報告

体制統御学講座生体応答学分野

稲葉カヨ

第8回目の開催を迎えた恒例の生命科学研究科シンポジウムは、2006年7月7-8日(金・土)にかけて京大会館で開催されました。2004年度から4月に入試説明会が開催されております。そのため、このシンポジウムは、研究室紹介の色彩を薄め、最先端の研究成果を報告すると共に、広く意見交換を行うことにより、研究科全体の活動を高めることを目的としています。研究科に属する協力講座、連携講座をはじめ特任部門を含めた全研究分野から、「微生物と細胞応答」

「微生物・植物の環境応答」「ポストゲノムの生命科学」「染色体ダイナミクス」「細胞応答におけるシグナル伝達制御」「神経と脳」「生命科学と社会」「免疫応答と場の構築」「植物応答の制御機構」「細胞動態と認識機構」の10のセッションに分けて発表がありました。昨年度の第7回シンポジウム後に、生命科学研究科の分野担当として新たに2名の教員が着任されており、タイトなスケジュールでしたが活発な質疑・応答が行われました。

これまで同様、本研究科、本学他部局はもちろん、広い地域より参加者を集めました。その数は、延べ359名に及びました。この中には、大学関係者以外に、製薬、化粧品、新聞社をはじめとする種々の業界からの出席者も多数含まれております。シンポジウムのポスター(写真)は全国の大学・研究機関に掲示をお願いしました。昨年度に引き続き、友禅柄の帯を使ってDNAをアレンジしたのですが、今年度はさらに和の手鞠を左上に加えて核に見立てています。

例年通り、1日目のシンポジウム終了後には懇親会が開催されました。和気藹々の歓談は、懇親会終了後も場所を変えて続いたと聞いております。なお、昨年度行われた2日目のシンポジウム終了後の一部の研究室の受験生に対する公開は、プログラムの都合上実施されませんでした。

本研究科構成分野の研究の研鑽の場として、このシンポジウムが益々機能するよう、また次回はさらに盛会となることを祈念して、第8回シンポジウムの報告とさせていただきます。

第8回 生命科学研究科 シンポジウム

平成18年 7月7日[金]・8日[土] 会場 京大会館 101号室
〒606-8305 京都府左京区白田河原町159 電話 075(751)8311
http://www.kyodai.kan.jp/access.html

7月7日[金]

西田研究科長挨拶 [9時15分-9時25分]
微生物と細胞応答 [9時25分-10時40分]
藤田 尚志 DNA-ヒストン相互作用する核のメカニクスと免疫応答機構
宇野野矢 細胞を介して伝達される信号
杉田 昌徳 胎前免疫応答の細胞生物学的基礎
微生物・植物の環境応答 [10時40分-12時]
鈴木 亮之 細菌のシグナル伝達システムと宿主-細菌相互作用、その応用
山本 隆夫 システム生物学と免疫応答の制御機構
依藤 文彦 イノキリシアンホロイシ生合成と生体相互作用
ポストゲノムの生命科学 [12時-13時30分]
赤尾 雅典 小体ゲノムとゲノム動態
井上 淳 DNA複製のFlow-Driver Architecture
中野吉吉 糖質を用いた遺伝子機能ネットワークの解析
竹安 寛 細胞核のナノスケール・メカニクスとマクロモレキュラー
吉村 成徳
染色体ダイナミクス [13時30分-14時40分]
村上 洋太 哺乳動物ゲノムの形成と維持機構
藤井 洋 2Dゲノム構造と細胞分化の制御
石川 冬木 3Dゲノム構造と遺伝子発現の分子的理解
柳田 宏徳 4Dゲノム構造と細胞分化の分子的理解
松本 智博 染色体の3D構造
藤原 誠 生物機能の起源と進化の再構築と全網性

7月8日[土]

細胞応答におけるシグナル伝達制御 [9時-10時30分]
西田 栄介 MAPキナーゼシグナル伝達系の調節機構と機能
実地 伊 細胞内シグナル伝達系と多様な生体機能
淡 長博 シグナルと免疫応答:免疫不全、自己免疫病、白血球の病

神経と脳 [10時30分-12時]
細野 孝 神経細胞形成におけるシグナル伝達の役割
渡辺 大 神経細胞の分化と神経回路形成
森吉 弘毅 神経細胞分化と神経回路形成
加藤 彰 神経細胞分化と神経回路形成の制御

生命科学と社会 [12時-13時30分]
細野 孝 生命科学コミュニケーション:異分野の文化の融合と創造
免疫応答と場の構築 [13時30分-14時40分]
稲葉 カヨ 免疫応答と場の構築
鈴木 亮之 免疫応答と場の構築
小栗 保晴 DNAメチル化による遺伝子発現調節とがんのメカニズムの決定と免疫の生理的意味

植物応答の制御機構 [14時40分-16時10分]
松本 智博 植物の免疫応答と病原菌の侵入
藤井 洋 植物の免疫応答と病原菌の侵入
河内 亨之 植物の免疫応答と病原菌の侵入
編野 秀哉 比較ゲノム学と植物の免疫応答

細胞動態と認識機構 [16時10分-17時40分]
佐藤 謙二 細胞動態と認識機構
野田 隆夫 細胞動態と認識機構
土村 匡 細胞動態と認識機構

参加費無料・聴講者歓迎

京都大学大学院生命科学研究科 詳細はホームページへ、<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/index.jhtm>

第8回生命科学研究科シンポジウムポスター

21世紀 COE プログラム「先端生命科学の融合相互作用による拠点形成」を終えるにあたって

21 世紀 COE 拠点リーダー

米 原 伸

京都大学生命科学研究科とウイルス研究所が共同で立ち上げ、平成 14 年(2002 年)から開始した 21 世紀 COE プログラム「先端生命科学の融合相互作用による拠点形成」も 5 年を過ぎ、終了しようとしている。柳田充弘教授を拠点リーダーとして発足し、柳田リーダーの定年後は私が拠点リーダーを引き継いで運営してきた本 COE プログラムが、発足して間もなかった生命科学研究科の発展と多くの大学院生の成長に寄与することができてきたなら、うれしいかぎりである。

21 世紀 COE という制度が開始されようとしていた 2002 年当初、個別研究に限らず使用できるという新しい性質の研究教育拠点形成費を、どのように使うべきかについて、明確なビジョンは我が国のどこにもなかったように思われる。そのような時期に、柳田教授が朝日新聞の『直言』に書かれた内容は非常にインパクトがあった。「個別研究には使わない」、「大学院生や若い研究者のための環境改善に向ける」、「まずは英語の実務能力の向上だ」、「院生にアシスタントとしての正当な給与を支払う」等の内容は、全国的に大きなインパクトを与え、その後の我が国における COE プログラム全体の方向性に大きな影響を与えた。

私自身もこのような考え方は正しい方向性だと考え、本 COE の運営に深く携わってきた。また、本 COE の中間評価調書に書いた下記の内容も重要だと考えている。『本 COE 拠点がさらに発展するためには、研究レベルをより高めると同時に、大学院生等の若手研究者の潜在能力を最大限に引き出し、磨きあげていくことが必要である。そして、国際的な研究者としての感性を本拠点の大学院生に修得させ、精神的に自立した若い研究者集団を育成し、真に挑戦的な研究に取り組む国際的な研究者を世に輩出していく研究拠点の形成を目指している。』このような考え方を基に本 COE を運営し、中間評価等でも高い評価を受けてきた。そして、来年度から文科省が新たに発足させるグローバル COE では、大学院生や若手研究者を国際的に卓越した研究者として育成することが大きな目的とされている。生命科学研究科も、もちろん応募している。そして、採択された場合には、本 COE と基本的に同じ考え方で運営していくことになると予想されるが、同レベルの継続だけでは仕方なく、より実質的かつ高いレベルの教育研究拠点として発展する必要があるだろう。次の COE が採択された場合には、より若い教員や研究者の積極的な参加がさらなる発展には必要不可欠だと考えている。

この 5 年間を振り返ると、なにより楽しかったのは、多くの学生さんと知り合いになり、話をする機会をもてたことである。国際学生セミナーに様々な形で関わった学生さん(実行委員のみなさん、本当にごくろうさまでした)、一緒にシンガポールにでかけた学生さん、いろいろな思い出がある。また、第三回国際学生セミナーの学生実行委員の諸君が、次は自分たちだけで学生間の研究交流会(学生フェスティバル)を持ちたいと自主的に希望し、援助を依頼してきたことは、一つのうれしかった思い出である。先に記した『精神的に自立した若い研究者集団』を、垣間見たように感じられた。

本 21 世紀 COE プログラムは終了するが、本 COE の理念を基に、生命科学研究科がさらに発展し、大学院学生のみなさんがさらに成長していくことを願っている。

最後に、400 名近い受講生を対象とした一週間に 50 近い英語講座や英語のレベルチェック試験の設定と運営を一人で行ってくれた、21 世紀 COE 秘書の高村綾子さんに感謝の意を表し、この文章を終えたい。

魅力ある大学院教育イニシアティブ 「生命科学キャリアディベロップメント」について

「魅力」取り組み責任者

石川 冬木

卒業生の皆さんは、自分が生命科学研究科で受けた大学院教育についてどのような感想をお持ちでしょうか？研究室での日々の研究、セミナー、21世紀COE事業の一環として行われた英会話少人数クラスなどについては、ある程度の満足を持っていただけたかと思うが、毎週火曜日に行われた集中講義形式の修士課程講義をはじめとして「研究科が組織的に行った教育」については、？の感想を持っていらっしゃる方も多いのではないだろうか。このような大学院教育は、私たち教員がむかし受けた教育を踏襲したものであり、教員自身も実はこのような旧態依然たる教育でいいのか、と内心うしろめたさを感じながら(少なくとも私の場合は)講義を行っていたのである。

これまでの教育で足りない点として以下の諸点をあげることができる。1)さまざまな背景をもって入学した学生に生命科学の基礎を系統的に身につけさせる工夫の不足、2)学生の主体的判断力を涵養できていない、3)喫茶店でのおしゃべりではない自分の言いたいことを相手に伝える「戦う」英語能力の欠如、4)卒業後の進路がアカデミックか企業における研究職しかないという思いこみの助長。

このような大学院教育の欠陥は多くの大学で指摘されている。文部科学省も危機感をもち、その対策として、平成17年より「魅力ある大学院教育イニシアティブ」(以下、魅力)という予算措置が講じられ、本研究科が提案した「生命科学キャリアディベロップメント」が魅力の1事業として平成18年度に採択され、18、19年度にわたって実施されている。

魅力の目標は、さまざまな進路で主体的・自律的に活躍する卒業生の育成である。学生の指導には、従来の主指導教員のほかに、2名の副指導教員が担当し、学生の求めに応じて適切なセカンドオピニオン、アドバイスを与える。修士課程講義は、できるだけ特論的なトピックス講義を避け、系統的・一貫性をもつものとする。従来講義がなかった博士課程でも1単位2科目の講義を履修する。特に博士課程講義のうち、必修1科目は、「先端生命科学」と称してその時々の生命科学の最先端を走る先生に講義をお願いする。ちなみに平成18年度に行われた「先端生命科学」の講師は、笹井芳樹理研CDBグループリーダー、山中伸也京大教授、審良静男阪大教授、森川耿右阪大教授であり、ちょっとしたシンポジウム、学会でも経験しえない充実した講義であった。さらに、博士課程学生は、生命倫理・生命科学と社会との接点、生命科学を学んだ者が卒業後期待される多様な活躍の場、議論を進める実戦的生命科学英語のそれぞれを学ぶ3つの選択講義から一つを選ぶことになっている。

一方、国際学会で発表をする学生には、その学会参加費、旅費滞在費をサポートするだけでなく、生命科学をバックグラウンドにもつ英会話講師によって事前に発表練習、模擬質疑練習を行い、自信をもって学会に臨めるように支援をしている。さらに、学生が主体的に提案した課題について、国内で最先端の研究を実践している研究室より学生を招き、研究科学生と研究集会を開催することを支援している。このような活動で知り合った仲間は、同じ研究分野における同世代のネットワークとして卒業後も学生の財産となるであろう。

魅力の詳細は、魅力HP(<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/miryoku/>)に掲載されている。生命科学研究科の変わりゆく大学院教育を是非ご覧いただきたい。



「実戦的生命科学英語」を学ぶ大学院学生

新任教授紹介



ご挨拶

高次生命科学専攻高次脳機能学分野

渡 邊 大

平成18年5月1日付で、大阪バイオサイエンス研究所より、中西重忠教授の後任として高次生命科学専攻高次脳機能学分野に着任致しましたので、ご挨拶申し上げます。

私は、平成2年に本学医学部を卒業し、はじめは、臨床医(脳神経外科)をめざしていました。研究者の道を選ぶことになったのは、大学院へ進んだ際に中西先生から研究の面白さについてお話を伺う機会があり、中西研究室で大学院の研究を始めたことがきっかけです。最初は、知らないことだらけで、戸惑うことも多かったですが、中西先生をはじめ研究室のメンバーが放つサイエンスに対する真摯な情熱に接するにつれ、研究の面白さにどんどん引込まれていった気がします。また当時は、学内にバイオサイエンスフォーラムというセミナーが月1回のペースで開催されていました。部局を越えて学内の生命科学系の研究室のスタッフや学生など若手が、それぞれ研究成果を発表し、活発に議論するのを目の当たりに聴いて、大いに刺激を受けるとともに、生命科学の広がり学ぶことが出来ました。バイオサイエンスフォーラムを牽引してきた方々が中心となって創設された生命科学研究科の一員として研究できることは、何よりも光栄ですし、これからの研究をおおいに楽しみたいと思っています。

我々の研究室では、脳の高度な情報処理機構、そしてその獲得メカニズムを明らかにすることを目的として研究をすすめています。現在は、zebra finch など songbird の音声制御・獲得をモデル・システムとした研究が中心ですが、様々なアプローチに挑戦したいと考えています。研究の面白さについて若い学生の皆さんと分かち合い、自分たちの新たな研究領域を拓くよう精進するつもりです。どうぞこれから宜しくお願い致します。



ご挨拶

統合生命科学専攻分子代謝制御学

荒 木 崇

平成18年5月より、統合生命科学専攻分子代謝制御学分野を担当することになりました。カリフォルニア大学サンディエゴ校でポストクとして研究に従事したのち、平成7年に本学理学研究科生物科学専攻に職を得て以来、京都で過ごして参りました。これまで、高等植物の発生生物学、できれば高等動物のそれとは趣きの異なるものを志向して研究を続けてきました。現在の中心的な関心は、植物が生殖成長に移行する過程である花成(かせい)を制御するシグナル伝達機構、特に、個体としての調和ある発生プログラムの変化を可能にしている全身的なシグナルの実体と作用機構の解明です。平行して、クロマチン構築因子群による発生過程のエピジェネティックな制御にも関心を持っております。

自分の価値観・尺度を一方的に他人に押しつけない鷹揚さが京都大学の美風であり、その恩恵にあずかってきたと考えております。そうした京都大学の美風に加えて、多様な研究室が集まり闊達な雰囲気があるのが生命科学研究科の大きな魅力のひとつであると着任して半年あまり過ごす中で感じました。恵まれた環境にあることを活かし、遠い先を見据えて、学生さんたちとのびのびとした研究をしていきたいと思っております。

研究室は北部構内の農学・生命科学研究棟7階の東南の一角に位置しています。セミナーなどでお近くにお越しの際はお寄り下さい。

第二回生命科学研究科・
ウイルス研究所学生
フェスティバルを終えて

ウイルス研究所 生体防御研究分野 D1

柴田寛文



2006年10月19日、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて第二回生命科学研究科・ウイルス研究所学生フェスティバルが開催されました。第一回学生フェスティバルの開催意義に共感出来たこと、また第一回の委員の方よりお誘いを受けたこともあり、今回、私は実行委員としてこの学生フェスティバルに携わることになりました。昨年同様、今年も21世紀COEプログラムの後援を頂けることとなり、心強い後押しを受け、準備を行なう事が出来ました。学生有志によって立ち上げられた学生フェスティバルの「学生による、学生のための研究交流会」というコンセプトを土台としつつ、学生フェスティバルの独自性を表現できないかと実行委員で話し合った結果、「萌芽研究発表」、および「実験技術を通じた交流」を新たなコンセプトとして加えました。これからの研究の方向性や研究過程を発表出来る場として「萌芽研究発表」を設置し、より多くの学生が、発表者として参加しやすくなるよう心がけました。また、研究を通じた学生間の交流をより一層深める目的で「実験技術を通じた交流」を目指しました。

今回が二回目という事で、フェスティバルそのものの認知度も上がり、また私達の掲げた新しいコンセプトが受け入れられたこともあってか、昨年を上回る41題の応募、来場者は約200人にも及びました。当日は、午前中に7題の口頭発表が行なわれました。来場された先生方を寄せ付けぬほど学生からの質問が活発で、改めて「学生による、学生のための研究交流会」である事が感じられました。第一回、第二回と行なわれてきた学生フェスティバルのコンセプトが受け入れられているのだと感じられた瞬間でした。午後からは5時間かけて、21題のポスター発表、13題の萌芽研究発表を行ないました。一つ一つのポスターをじっくり見たり、心ゆくまでディスカッションする事で、有意義な5時間となりました。夜にはポスター会場にて懇親会が開かれ、ポスター発表時の活気をそのままに、お酒を飲み食事をしながら引き続きディスカッションをする姿も見られ、あちらこちらで活発な交流が図られていました。

普段、生命科学研究科とウイルス研究所は立地的な問題もあり、ほとんど交流がありません。午前、午後の研究を通じた交流、懇親会での一大学院生としての交流を通じて、研究の発展はもちろんのこと、人間的な発展が少しでもみられれば今回の会の目的は十分達成されたと言えるのではないかと思います。来場者によるアンケートには、私達が至らなかった点についての指摘もあり、来年の第三回学生フェスティバルではさらに新しいチャレンジができそうです。嬉しかった事は、次回に繋がるような指摘が昨年よりも増えた事でした。参加する学生が、このフェスティバルに何らかの期待をしている事の表れだと捉えています。学生フェスティバルが少しずつ浸透、定着し、参加する学生の中にも新たな意識が芽生え始めている、という確かな手応えが感じられました。

最後になりましたが、改めて、今回の開催にあたり、昨年に引き続きご理解をいただきましたCOEワーキング委員の先生方、生命科学研究科の基幹講座の先生方、ウイルス研究所の先生方にこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。また米原伸教授には、温かく時に厳しい意見を頂戴し、委員一同大変感謝しております。生命科学21世紀COE拠点秘書の高村さんには、大きなご助力をいただきました。運営に関しては多くの方々のご協力のおかげで、仕事をやり遂げる事が出来たと実行委員一同思っております。第二回学生フェスティバルに関与して下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。

少しずつ定着してきた学生フェスティバルが来年も開催され、今年以上に活気ある学生主体の学術交流会になれば良いと思います。末筆ながら、現在、第二回の実行委員数人が中心となって、来る第三回作成フェスティバルの準備を進めております。ご興味のある方は是非、須藤(hsuto@virus.kyoto-u.ac.jp)までご連絡下さい。

第5回国際学生セミナーを終えて

高次生命科学専攻生命文化学分野 博士後期課程1年

室 井 かおり

去る2月27日から3月2日にかけて、京大会館および、医学・生命科学総合研究棟(G棟)において、21世紀COEプログラム「先端生命科学の融合相互作用による拠点形成」の一環として、「第5回国際学生セミナー」が開催されました。

本COEプログラムに所属する学生14人が実行委員となり、企画運営を行いました。「国と分野を越えた若手研究者同士の活発な研究交流」をコンセプトに、事前研究交流(2月27日)、シンポジウム(2月28日、3月1日)、グループセミナー(3月2日)などのプログラムが行われました。

シンポジウムでは、海外からの招待者14名に、本COEの学生14名がオーラル発表を行い、また、合計86名のポスター発表が行われました。審査員として他大学も含む12名の先生をお招きし、オーラル発表者の中から上位3名に賞を授与していただきました。ポスターの方も、来場者の方に投票いただいて上位5名が賞を授与されました。2日間で約300名が参加し、特にポスターセッションでは至る所で熱い議論がなされました。

また、グループセミナーでは海外からの招待者を含む6人程度の7つのグループに分かれ、各々異なる分野の研究者が議論を行いました。今回新たに取り入れられたこのプログラムは、1人がポスター等を用いて自分の研究を説明し、他の参加者が全員で輪になってディスカッションを行うという斬新な試みです。初めての試みだったため、幾つかの問題点もありましたが、ほとんどの参加者にとっても満足していただけました。従来のポスター発表等とは違い、発表者と参加者が対等の立場で、また複数人数で議論を行うということができました。1人あたり約20分の持ち時間でしたが、それでは収まらないほどに議論が盛り上がりました。これからもっと洗練されて、ますますこのようなセミナーが充実していくと、国際学生セミナーも新たな可能性が広がっていくと思います。

生命科学研究所・ウイルス研究所は、実に幅広い研究をしています。科学の進歩に伴い、研究はより細分化されてきました。隣の研究室の研究内容すらわからない状況というのも、よくみられることです。お互いの研究を知る機会というのは、少ないと思います。そういう数少ない機会として、学会が考えられます。しかし、学会はある特定分野に限定された専門的な場である場合が多く、逆に、分野を広くすればするほど、学会の規模が大きくなる傾向があります。あまりに規模の大きい学会では、全部把握することは難しく、自分の専門外の話聞くということは結局あまり行われなように思われます。そのような中において、このセミナーは全てをまわりきれる程度の規模で、生命科学の多様な研究の今を知ることのできる、稀有なものになったと思います。学会よりも、より近い距離で若手研究者同士が、お互いの研究について議論を交わし、理解を深めたことと思います。プレゼンテーションや英語のスキルが高いにこしたことはありませんが、たとえプレゼンを失敗しても、英語がうまく話せなくても、それに「気がつく」絶好の機会になったと思っています。若手研究者が他分野や海外の人との交流の中で、刺激を受け、何か新しい「視点」を手に入れることができたなら幸いです。



魅力ある大学院イニシアティブ 「学生主催研究発表会」を終えて

統合生命科学専攻シグナル伝達学分野

遠藤 達矢

平成19年2月21日から2日間の日程で「学生主催研究発表会」を行いましたので報告します。本会は、「発生生物学」を共通テーマに、普段あまり接することのない領域についての知識を深めると同時に、分野、研究室間の垣根を越えて交流を深める目的で行われました。各自の扱う材料も動物、植物からコンピュータまでと多彩、欲張りなのがこの会の特徴で、京都大学生命科学研究科より4名、東京大学より2名、名古屋大学より1名、理研CDBより1名の大学院生が発表者として参加しました。

発表の形式は質問を入れて1人45分で、活発な議論を促すために発表の最中にも質問を行ってよいことにしました。「他の研究室の学生たちと行うプログレスリポート」という感じでイメージしてもらえればよいと思います。わたしは、基礎知識のイントロが10分、自分のデータが10分ほどの内容でスライドを構成しましたが、初めての機会ということもあり、質問や意見が出ずに時間がかかり余ってしまうのでは……という不安を、発表前に感じていました。

当日は、議論を深めてもらう「ご意見番」として、特任助手、ポスドク、博士課程の方々にも8名参加してもらいました。トップバッターはわたしでしたが、前日までの心配をよそに、質問、意見が多く飛び交い、活気のある発表になりました。参加者のみなさんとやり取りしているうちに、45分はあっという間に過ぎました。中には、45分では質問が終わり切らず、結局1時間ほどになった発表もありました。かしこまったセミナーなどにはない、気軽に発言できるような雰囲気が感じられました。

今回の研究会を通じて、他分野に対する理解が深まると同時に、他大学の同級生たちが、日々どういう考えで研究しているのかという情報交換もできました。自分にはまだまだプレゼン力などが不足しており、努力すべきこともいくつか明確になりました。本発表会は毎日研究室で過ごすわたしにとって新鮮な刺激であり、みなさんと共有できた時間は今後の財産になると感じています。

最後になりましたが、このようなすばらしい会を支えてくださった先生方、参加者の皆さん、そして「魅力ある大学院イニシアティブ」プログラムに感謝いたします。



ノーベル化学賞受賞者 Avram Hershko 教授による セミナーが行われました

高次生命科学専攻高次生体統御学分野

垣塚 彰

平成 18 年 11 月 15 日(水) (16:30~18:00)に医学部 B 棟講義室において、2004 年にノーベル化学賞を受賞されたイスラエル工科大学教授 Avram Hershko 博士のセミナー “Roles of the ubiquitin system in cell cycle control” を生命科学研究所の主催、医学研究科・理学研究科・再生医科学研究所の共催で開催しました。

会場には、200 名を超える学部生・院生・教員がつめかけ、立ち見がでるほどの盛況でした。Hershko 教授には、ノーベル賞受賞に至った実験の経緯のみならず、研究での目のつけどころや発想の持ち方などを熱く語っていただき、多くの聴衆に感銘と研究への新たなモチベーションを与えていただきました。



「1ヶ月間の海外研修を終えて」

統合生命科学専攻分子応答機構学分野
修士課程2回生

梅川 碧里

生命科学研究科の大きな特徴の一つは、英会話教育や国際学生セミナーを毎年行うなど、研究者としてのコミュニケーション力、英語力を習得するためのいくつかのプログラムが設けられていることだと思います。平成18年度には、本研究科が採択された文部科学省が支援する「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「生命科学キャリアディベロップメント」が実施され、そのプログラムの一つである「実践的生命科学英語コミュニケーションプログラム」が始まりました。その支援を受けて、私も昨年11月から1ヶ月間、メリーランド大学との共同研究でアメリカへ行きました。物心ついてから初めての海外生活であり、また派遣先の研究室の方とは国際誌を通じて以外にまったく面識がなかったため、派遣前は不安も多くありました。しかし実際に現地に着いてしまうと、全てが新鮮に感じられ、不安を感じる暇もない程、刺激的な日々が待っていました。アメリカという環境の違いだけでなく、人種もバックグラウンドも異なる研究者と共に実験に取り組む中で、これまで行ってきただけの操作から研究そのものについて、たくさんの良い面・悪い面が浮き彫りに見えました。また下手な英語を駆使しつつ、自分の研究について真剣にディスカッションすることで、おそらく研究者になるために必要な「度胸」が多少はついたのでは、と我ながら思いました。今回の海外派遣によって、多くの研究成果が得られただけでなく、派遣先と共同研究の関係を築けたことは、引き続き博士課程で行う研究にもつながる大きな収穫です。そして個人的ではありますが、大きな人生経験の一つとなりました。海外派遣の支援を戴いた生命科学研究科に感謝するとともに、今後は狭い領域に閉じこもらず、幅広い視野をもった研究・生き方をしていきたいと思っています。



「受け入れ先の Dr. Lai-Xi Wang のお宅にて」

生命科学研究科事務部の設置について

生命科学研究科事務長

福 本 穂

生命科学研究科は、平成11年4月に設置されましたが、独立した事務部は設置されず、理学研究科等事務部が併せてその事務を所掌してきました。

しかしその後、平成16年4月からの国立大学法人化に伴う事務改革の一環としての組織改編により、平成18年4月から、かねてからの念願であった生命科学研究科事務部が理学研究科等事務部から分離し、新たに設置されることとなりました。

事務部設置に際しては、理学研究科等事務部において生命科学研究科の事務を担当していた職員をほとんどそのまま生命科学研究科に異動させることとし、事務が停滞することのないよう考慮しました。定員については、従来の生命科学研究科担当数に加え、学内定員再配置により定員2を手当てされ、事務長以下、総務掛、学務掛(情報担当を含む。)、経理掛及び研究推進掛の事務組織を立ち上げました。

また、事務部の所在地は、百万遍の交差点に近い工学部9号館の1階に決定し、研究科の予算をいただいて改修工事を行い、立派な事務部が誕生し、真新しい部屋での業務開始ということで、西田研究科長のもと、生命科学研究科の発展を支えるべく気持ちも新たに事務部職員一同頑張ってきました。

ところが、昨年の12月末に事務本部から連絡があり、耐震工事のため平成19年6月頃までに工学部9号館から退去しなければならなくなりました。

私達としては残念なことではありますが、建物の暫定利用の条件として退去することはやむを得ず、再移転をする状況にあることを申し添えます。

教員人事異動

平成19年3月15日現在

年月日	異動内容	所 属 ・ 官 職 等		氏 名
		新	旧	
18. 3. 31	転出(辞職)	北海道大学大学院先端生命科学研究院教授	遺伝機構学講座 細胞周期学分野 助教授	小布施 力史
18. 4. 1	研究休職		応用生物機構学講座 生体情報応答学分野 助手	神戸 大 朋
18. 4. 1	採 用	応用生物機構学講座 生体情報応答学分野 助手	大学院農学研究科産学官連携研究員	増田(門間)敬子
18. 4. 26	採用(協力講座)	細胞機能動態学講座 細胞情報動態学分野 助教授	東京都臨床医学総合研究所 主任研究員	米 山 光 俊
18. 5. 1	採 用	認知情報学講座 高次脳機能学分野 教授	(財)大阪バイオサイエンス研究所 副部長	渡 邊 大
18. 5. 16	昇 任	環境応答制御学講座 分子代謝制御学分野 教授	理学研究科 生物学専攻 助教授	荒 木 崇
18.10. 1	採 用	京都大学研究員(JSPS 助手(特任))		大 門 靖 史
"	"	京都大学研究員(JSPS 助手(特任))		安 田 邦 彦
"	"	京都大学研究員(JSPS 助手(特任))		白 井 哲 哉
"	"	京都大学研究員(JSPS 助手(特任))		金 沢 崇 之
18.10.16	昇 任	高次応答制御学講座 システム機能学分野 助教授	高次応答制御学講座 システム機能学分野 助手	竹 松 弘
18.11. 1	採 用	京都大学研究員(JSPS 助手(特任))		石 崎 公 庸
19. 1. 27	死 去	-----	応用生物機構学講座 生体情報応答学分野 助教授	岩 井 裕 子
19. 3. 15	転出(辞職)	鹿児島大学農学部特任助教授	応用生物機構学講座 微生物細胞機構学分野 助手	玉 置 尚 徳

編集後記

「国際学生セミナー」や「学生主催研究発表会」が年度末に開催されたことから、いぶき5号の編集作業が年度末ぎりぎりになってしまい、執筆いただいた先生方や学生のみなさんにご無理をお願いすることとなりました。幸いにも皆様のおかげで無事にできあがることとなりました。御礼申し上げます。いぶき6号はひよっとすると新年度早々に発行するように改めた方が無理がないかもしれないと感じています。(鈴木 秀之)